

自分を見つめ直し、他者と対話し、 ねばならないから自分を解放する

自分について考え、社会について知る、余白の時間を

デンマークのフォルケホイスコーレは、「人生の学校」とも呼ばれる場所で、17歳半以上の人なら誰でも学ぶことができる。同国内に70校あり、デンマークの人にとっては身近な存在だ。学ぶタイミングや目的は人それぞれで、高校卒業後に自分が見たいことを見つけるために行く人もいれば、一度仕事を辞めて自分を見つめ直すために行く人もいる。余白、対話、そして民主主義を柱としており、講義や教科書を通して知識やスキルを身につけるのではなく、リアル



Compathの共同創業者・代表の安井早紀さん(右)と遠又 香さん(左)。photo:和田北斗

な体験や人々との対話を通して哲学的に学びを深めていくのが特徴だ。デンマークでのフォルケホイスコーレに出会い、そのあり方に衝撃を受けたという安井早紀さんと遠又香さんは、2020年、北海道・東川町でSchool for Life Compath(以下、Compath)を開校した。「フォルケホイスコーレの特徴の一つが、学びに対してジャッジを行わないということ。入学試験もテストも卒業に必要な単位もなく、成績もつきません。他者からの評価から解放され、自分のやりたいことや好奇心にしたがい学びます。また、自分らしく存在すること、個を尊重することを軸として、他者や社会にどうはたらきかけるか、いかにして欲しい未来を共創していくかを大事にしています。」

一方、日本に目を向けると、教育やキャリアがシステム化され、高校、大学、就職…と間を空けず順調に進むことが良しとされています。また、転職する場合も、在職しながら転職活動を行い、休むことなく次の職にシフトするのがまだまだ一般的です。それで個人や社会が幸せであ

ればいいですが、そうではないのが現状です。我慢、不満・不安、他者への無関心、閉塞感といったものが積み上がっている気がしてなりません。少し立ち止まって、自分について考える、社会について知る。長い人生においては、そんな余白の時間をもつ必要があるんじゃないか、自分の好奇心の赴くまま評価から解放されて学ぶ機会があつていいんじゃないか、そう考えてCompathを立ち上げました」

リアルな体験を通して内省・対話が生まれる

Compathのコンセプトは、「私の小さな問いから社会が変わる」。「自分が本当にもやりたいことってなんだっけ、これでいいんだっけ…といった、忙しい日々のなかで見失いがちな小さな問いや違和感と向き合い深めることが、自分自身のためだけでなく他者や社会のためにもなることを体感してほしい」と安井さんは言う。コースは、1週間、4週間、10週間の3種類。例えば4週間のコースでは、「私の問い」を起点に、「知る・感じる」「語り合う」「動いてみる・形

四季折々の自然の美しさを感じられる東川町。冬は、まさに白銀の世界。写真は、参加者みんなで近くの旭岳に登り、思うままに散策したときのワンシーン。ふと立ち止まり、冷たく澄んだ空気です。胸を満たす。photo:清水エリ

●4週間コースの期間中の過ごし方

7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21
起床・朝食	朝の会	授業	授業	授業	授業	授業	授業	授業	授業	授業	授業	授業	授業	授業
						暮らしの時間 or フリータイム						夕食		フリータイム

●授業スケジュールの一例

MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT	SUN
28	29	30	31	1	2	3
4 Introduction 森のMEISHI	5 Introduction 学びの旅の始まり	6 余白	7 Experience ガーデンに親しむ	8 Dialogue わたしの物語	9 オフ	10 オフ
11 Experience お米とコミュニケーション	12 Experience 水の先には	13 余白	14 Experience 人類×食へる	15 対話と振り返り	16 オフ	17 オフ
18 オフ	19 Day Camp!	20 Action デザインスプリント	21 Action デザインスプリント	22 対話と振り返り	23 オフ	24 オフ
25 余白	26 余白	27 Reflection わたしたちの物語	28 Dialogue わたしたちの物語	29 卒業式	30	1

「今」の延長線のままの人生を送るが、いつか、違うかもと思うときが

「振り返る」をテーマにした授業を通して思考を深めていく。授業は午前のみで、平日1日と休日は休み。余白の時間の使い方は自由だ(左図)。新しい仕事に向けて準備中の社会人、休学中の大学生、会社の休暇制度を利用中の会社員などさまざまな人が参加し、共同生活を送りながら学んでいる。

来る…という予感を抱えている人が多いという。いずれのコースでも、地元の人話を聞いたり、ものづくりやアクティビティに取り組んだり、参加者同士が語り合ったりと、リアルな体験を大切にしている。

「東川町は木工家具の製造が盛んで、家具職人さんに何を考えながら木と向き合っているのかを話してもらったことがあります。気候や環境が安定していると年輪の幅が均等になり、不安定だと幅も不均等になる

**立ち止まることで、内面も
外の世界も見え方が変わる**

いわゆるプログラムは最低限に留め、自由時間、つまり余白の時間を多くとっている。最初は参加者の多くが「何をしたらいいのか」と戸惑い、余白を無理に埋めようとするという。

「しばらくすると、自分はここに何をしに来たんだっけと立ち返り、あえて何もしないことができるようになります。余白って何も無い空洞だと思っていたけど違っていた、というのはある参加者の言葉です。車窓を流れていた景色が、止まるとよく見えるようになるように、いつもは見えていなかったものやスルーしていたものが、見えるようになった…と言っていたのが印象的です。また、ある学校の先生は、コース修了後にこれまで毎日バリバリやっていた部活動を休みにしてみたところ、かえって強くなったそうです。立ち止まることで、自分の内面も外の世界も見え方が変わってくる、ああこうだったんだと気づく、余白から新しい力を生み出す…これはとても大きな一歩だと思えます」

参加者同士の交流や対話も、価値観や行動の変容を促す。日頃身を置いている環境では出会うことのない多様な人々と出会い、深く知り合うことで、「普段背負っている肩書きや立場が削がれ、自分自身のねばならない、が外れていく感覚がある」と安井さんは言う。

「一人で学ぶのではなく、他者と関わりながら学ぶのも、フォルケホイスコーレでの学びの大事な要素です。他者と共に生きる、社会をつくっていく一員となる、その練習をする場所という意味でもフォルケホイスコーレは、学校なのです。そして、Companiも、実社会では挑戦しづらいことを小さくやってみる、実践の場でありたいと考えています」

**余白があるほうが学びになる。
詰めすぎず、手放し、待つこと**

Companiのコースを設計するなかで、「壁にぶつかることが何度もあった」と安井さんは振り返る。

「高校の先生方には共感していただけるかもしれませんが、プログラムのしつかりと作りたくなっちゃうんですよね。3年ほどやってきて実感しているのが、余白をもたせたほうが良い学びになるということ。かっちりとしたプログラムを用意して、何か問題があったら介入して…というやり方だと、確実に均質な成果は出

るかもしれませんが、面白いことは起こりません。もっとうつと、思い出に残らないんです。参加者アンケートで印象に残っていることを尋ねると、8割程度の方がプログラム以外のことを挙げます。意図せず偶然に出会ったもの、自分で掴み取ったものの記憶に勝るものはありません。これぞ、その人だけのオリジナルの学びです。学習者は自ずと学び、育つもの。これに気づいてから、計画しすぎない・詰め込みすぎないこと、何かしてあげないといけないという責任感を手放すこと、焦らず待つことを、意識するようになりました。これらは学校教育においても大事なことなのではないかと思えます」

2024年4月には、念願の校舎がオープンするCompani。安井さん・遠又さんの目標は、日本にフォルケホイスコーレの事例をつくること、余白をとりたいたいときにとれることが当たり前前に許容される世の中にあること、そして、楽しく長く続けることだ。

「このままでは無理が生じると、多くの人がうつすらと感じているはず。社会の空気をすぐに変えることはできないけれど、大事なものは、一人ひとりが立ち止まり、問いと向き合うこと、多様な人と対話を重ねて小さな変化を起こすこと。草の根からみんなでじわじわと変えていく、Companiをそんな存在にするために試行錯誤を重ねていきたいです」